
ありがとう

nagoyan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとつ

【ZPDF】

N2047D

【作者名】

n a g o y a n

【あらすじ】

とある男子校に通う俺。毎朝の通学電車からの恋…その結末は?

春の温かい朝日を浴びて電車を待つてゐる。今日からまた一週間の始まりだ。ホント眠くなるくらいの快晴だな。桜の花もほとんど残つてない。

俺は岡本健太。先週17歳になつたばかりの高校2年生。自宅の最寄り駅から30分かけて田んぼの真ん中にある豊和高校に通つてゐる。とにかく見渡しの良い学校だ…

そんなこんなで、平凡な高校生活を送つていたのだが、最近といふかこの4月から、少し樂しみがある。朝の電車に2つ先の駅からめちゃくちゃ可愛らしい子が乗つてくるんだ。去年も何度か見た事あるから、2年か3年生だろう。それがこの4月からは毎朝同じ電車に乗つてくる。「男子校に通う俺にはこの上ない日の保養だな」くらいにしか思つてなかつたけど。電車の30分は貴重な睡眠時間だけど、それを削つても見ていたいくらいとにかく可愛い。

ほら、今日もだ。あの制服は東野高校だよな。東野高校は、俺の高校の駅より3つ先で降りるんだろう。俺が降りる駅の一つ前から、彼女の友達が2人乗つてくる。それまではすごく大人しそうに見えるのだが、友達とわいわい話していると、元気のいい近頃の子つて印象だ。

東野高校といえば、洋介と同じだ。浦田洋介。小・中と同じだつた、俺の幼馴染みで、東野高校の野球部。あいつは毎日朝練だから、ずいぶん早い電車で行つてるはず。でも帰りは、部活終わる時間が同じくらいだから、たまに一緒に帰つてくるんだ。

そうだ、あいつにあつたら、あの可愛い子知つてるか聞いてみよう。

て事で、早速その日の帰りに洋介に聞いてみた。

「あのわあ、森島堂から東野に通つてゐる子知らん? 最近あそこから東野の女の子乗つてくるんだけど」

「ああ、あんな所から乗つてくるのは菅沼つて子だな。菅沼綾。同じクラスの子だよ。それがどうかした?」

「同じクラスなん? えーなー。めっちゃ可愛くない?」

「まあ普通に可愛いね。かなり人氣あるし。でもうちの野球部の奴と付き合つてんだけどねー」

「……なんだ。そりやあんな子放つとくわけないよな。マネージャーなん?」

「いや、合図つて言つてたつけな。うちの合図部強いから、練習大変みたいやわ。俺ら代える時もまだ電氣ついてるから。で、その彼氏は練習終わるまで待つてゐるのさ。」

こんな感じで洋介から色々聞いたわけだが。生まれたての恋心はあつたりと破れ去つたのであつた……。話した事もなければ面識もないのに、勝手にショックを受けて、俺は何しとんねんって笑つて片付けることにした。

それからも彼女は毎朝同じ電車に乗つてきた。しばらくは、今まで程には彼女に魅力を感じなくなり、「あ、今日もいー」と確認するだけですぐに寝ていた。この時期、もうすぐ春の大会だから練習がキツくなつて、眠気を誘いまくるのだ。あ、ちなみに俺は剣道部ね。幸か不幸か、部活の事とか色々と考へる事があつたので、彼女のモヤモヤした気持ちはいつの間にか消え、次の週には、今までのようすに電車の中では寝ずに、彼女を見ている方が多くなつた(怪しいか…)

そんな感じになつてからは特に何の変化もなく、部活中心の生活を過ごして、朝彼女を見る事も当たり前になつていつたのであつた。

そんな当たり前の日々を重ね、日差しの強い夏を迎えたある7

月のある日、帰りに洋介と一緒にになった。

「おっす。なあ健太、来週の日曜暇？」

「まあ日曜は部活無いけど。何かあんの？」

「うちの合唱部のコンクールなんだよ。一緒に行かね？」

「そーゆーのはお前の彼女と行けばいいやん」

「あいつその日大会なんよ」

「『』道だっけ？そつかてか野球部つて日曜部活だろ」

「ところがどっこい。一昨日夏の大会で負けて3年が引退してさ。夏休みまで日曜は無いんだよ。で、行くの？行かないの？」

「ん……ま、暇だからいーよ」

と、あまり気が進まない返事をしたのだが、内心は結構テンション上がつてたんだけどね。「合唱つて事は菅沼さんいるじゃん。歌つてる姿はどんな感じなんやろ」ってな具合で、すぐく楽しみになつてきたのであつた。

それから当曰まではまた毎朝彼女に注意を注ぎ、別にデートするわけでもないのにドキドキワクワクを繰り返していた。俺つて単純なんだなと思いながら、この気持ちをとても心地いいものと感じていた。

コンクール当日。観客席にいる生徒はみんな制服だから、俺1人だけ豊和の制服で少し目立つてしまっていたかもしない。うちの高校は合唱部無いんよ。洋介に連れられて席に座ると洋介が指さし、

「ほら、あの前にいる3人の真ん中が菅沼の彼氏。3人とも野球部だよ」

なるほど。野球部らしく髪が短く、背も高そうだ。横顔だけ見えたが、爽やかな感じだ。あいつか……お似合いだな……

東野は最後から3番目の演奏だった。東野の生徒が舞台に出て、すぐに彼女を見つける事が出来た。

「やっぱ断トツで可愛いな、菅沼さん」

「あんま大きい声で言つと彼氏に聞こえて怒られるわ」

「やべつ。彼氏恐いの？」

「いや、普通にいい奴だけど。彼女想いな奴だよ」

「ふしゅー。やっぱこーゆー話し聞くと凹むんだよな。まあいいんだ。」

今日は歌つてる彼女を見に来ただけだから。

東野の演奏が始まった。I wishの「明日への扉」だ。俺は川嶋あいの声が大好きだから、この曲を聞くと鳥肌が立つんです。合唱用にアレンジされた曲は、耳が喜ぶのが分かるくらい美しかった。しかし、そんな曲を聞きながらも、目と頭の中は彼女をしつかりと捉えていた事は言うまでもないだろう。

心洗われる歌に酔つて会場を後にしてからも、俺の目、耳、頭ん中はさつきの映像が離れなかつた。久々に感動したや。そして…やっぱり彼女は可愛かつた。

それからすぐ夏休みになり、部活だけの日々が続く。朝彼女を見る事も無くなつた。「部活の時間が違うんだろうな…」と軽く凹みながら電車で寝ながら部活に行く。高校の夏休みの部活は今年が最後だからと、とにかく練習ばかりして過ごした。ついには「早く学校始まらんかな」と、高校生らしからぬ事まで考えていた。

待ちに待つた(?)9月。いつものように彼女も電車に乗つて来るので、どこか元気が無いように見える。途中から乗つてくる友達と話してゐる顔も、今までの笑顔とは違う感じだつた。「夏バテでもしてゐるのかな」くらいにしか思つていなかつた。

しかし、9月の終わりに近づいてもずっと夏バテしている。違う、夏バテじゃないのかなと思い、洋介にそれとなく聞いてみた。

「東野で風邪流行つてゐる?」

「んな事ないけど

「夏バテは?」

「もうこの時期にはバテないだろ」

「だよな。東野で元気無い人がいるみたいなんだけど
あえて誰か分からないように言つてみた。

「菅沼か?」

ちつ、なぜ分かつた…

「そおそお。9月の頭からずっと夏バテっぽくてさ。今日もまだ具

合悪いみたいだつたし」

「うん…夏大変だつたんだよ…」

「合唱つてそんなに大変なん?」

「違くて。あいつら夏の間に別れたんだよ」

「え、マジで? なんで?」

「彼氏の方が地元の元カノと戻りたいって。夏の大会で負けた試合

をその元カノが見に来て、試合の後に会つて色々話してたみたい。あいつも悩んでたらしいけど、結局は8月になつてすぐ菅沼に出て別れたんだって

「ずいぶん一方的やな。『他の人と付き合いつから別れて』なんて言われて納得できんやろ」

「だからあいつは『お前モテるだろ?だからお前といふと色々気にしなきやいけないし疲れるんだよ』って言つたつて。本心かどうかは分からんけどな」

「いやいや、本心じゃなくとも言われた方は相当なダメージやる…うわあ…」

「学校では何ともなかつたようないいけど。そりや無理だよな」
俺もなぜか凹んだ。彼女の事を何か聞く度に凹んでいい気もするが。それだけ俺の中で彼女の存在が大きくなつていい事は確かだ。ただ、だからといってどうする事もできない。洋介から聞く話で凹む事しか…

か…

夏の出来事を知つてから彼女を見ると、今まで以上に元氣無く見えた。力がないというかフワフワしてるとこつか。見ていて辛いと思つ時さえあつた。

そんなある日、朝、駅で電車を待つていると洋介がやつて來た。
あいつ朝練のはずなのに…

「よつ。ゆつくり起きるつて氣分良いな

「朝練サボつたのかよ」

「人聞き悪いな。うちら今日から試験なんだよ。で、うちらのキャブテンが『試験の日は朝練無くしてくれ』って言つたらそれが通つてさ」

「そんな権力持つてんの?」

「そいつ学年1位だから、成績下がつたら部活辞めるつて親が顧問に言つてきたらしいよ」

「高校生になつてもそんな親いるんだ…」

「ま、それで朝ゆつくりできるんだから。いつかどしても助かるぜ」

その時、森島堂に着いた。

「あれ？ 浦田くん朝練は？」

彼女が乗ってきて、いつもいなはずの洋介を見つけた。

「今日から試験中は無いんだ」

「そりなんだ。おはよう

「おはよう。勉強どんな感じ？」

この時ほど洋介をうらやましいと思つた事は無かつた。その時、洋介がナイスタイミングで、

「あ、こいつ同じ小・中に通つてた健太ね。豊和の剣道部」
さすが洋介。俺の心が読める奴だ。

「どうも、岡本健太です。こないだのコンクール、洋介と一緒に見に行きました。マジで感動しました」

「そうだったんだ。ありがとう。私は菅沼綾です」

めーーーっしゃ緊張した。びっくりするくらい。いやあ、「洋介ナイス」って目で合図したら、あつむも「だろ?」みたいな合図をしてきた…と思ひきや、

「こいつ前からずつと『森島堂に可愛い子いる可愛い子いる』って
うるさかつたんだよ」

お前：余計な事を。

「だからコンクールにも連れてつてさ。そしたらせりに惚れちゃつて」

「おい洋介…（その口を縫つてやるーか）」

「またまたー。でも歌で人を感動させられたのなら、すっごく嬉しい

と、思わぬ展開から冷や汗タラタラの朝でしたが。学校に着いてから思い出すとニヤけてしまう。それにしても、きれいな声だったな。笑った顔も可愛かったし。ただ、洋介が余計な事言つたから、それ

で引かれてないかが非常に心配だつた。

その週は、毎日彼女と話した。もちろん、洋介を仲介してだけど。いきなり、

「岡本くんは彼女とかいないの？」

「と聞かれた時は、生きてて一番顔に血が通つてゐ事を確認した。少し期待して、

「……いないよ」

「そつか。男子校だと大変よね」

「ですよねー。はい終了。まあ、俺が固まつてると洋介が面白い」と言つてくれるからね。いい奴だ。

と、楽しい一週間が過ぎて。次の週になると、もちろん洋介は朝練だから来ない。「うわーどうじょう。ずっと寝たフリしてゐるかいや、そんなの毎日続けられない。んー、何て話そ…」そんな事を考へてゐうちに彼女がやつて來た。

「岡本くん、おはよ！」

「あ…おはよ」

「具合悪いの？」

「全然。元気たっぷりだよ」

たっぷりって…

でも大丈夫だ。普通に話せるや。これでチキンな俺とはお別れだな。いやー、それにしても清々しい朝だ。途中から乗つてくる彼女の友達は、何故か氣を使ってあいさつだけして、少し離れたところへ行く。何だか照れるが、彼女は特に気にした様子が無かつたので、俺も気にせず話した。

あまりに楽しい日々だったので、彼女の心の傷の事を忘れていた。話している時は楽しそうに見えるし、明るい子にしか見えない。でも傷を隠して楽しそうにしているのなら、俺が彼女に無理させていいんだよな。自分の楽しみしか考えていなかつた事を後悔した。これからどうしよう。困つた…そんな時は…

「おっす、洋介。あのさあ、菅沼さん学校でどんな感じ?」

「どうって、普通だけど。また何か变なん?」

「そういうわけじゃないけど。最近話してると楽しそうにしてるけど、本当はどうなんだろうなあつて思つて」

「聞いてみりやええやん」

「簡単に言つたねえ。まだ話すようになつて間もないのに聞きたくいやんか」

「まあな。でも『岡本くん、いい人だね。樂しそよ』って言つてるよ」

いい人ね…なんかよく聞く単語だ。

次の日、こつものよつと話して、それと回じノリで聞いてみた。

「菅沼さんって彼氏いないの?」

彼女の顔を、ものすごくうかがつた。

「ああー、聞いたやつたか~」

「あ、じゃ聞かなかつた事にして」

「いやいや、別にいいよ。今はいないんだなあ。夏にフラれちゃつてね。そもそも彼氏探し始めるかな」

特に変わった様子は無かつた。普通に話してる感じがした。これをどう捉えたらいいのか分からなかつたが、話してて楽しいという事実に変わりはなかつた。

それからは彼女の心の傷の事など忘れ、毎朝楽しく話していた。

衣替えの時期になり、風も冷たくなってきた頃、彼女が唐突に、

「岡本くんつて新人戦いつ？」

お、これはもしや応援に来てくれるとか？

「来週の土日だよ。なんで？」

「そつか。よかつた」

あ、違うのね…

「あのね、私たちの定演が再来週の日曜にあるの。よかつたら聞きに来てほしいなあと思つて。忙しい？」

「行く」

という事で、東野高校合唱部の定演に行く事になった。その日洋介は練習試合だから、1人でいくというサプライズ（？）

そして当日。朝、メールで「岡本くんどこにいるか探すから、前の方に座つてね。曲の間に合図するから」と来て、テンション上がりまくりで会場まで向かった。言われた通り、前から5列目に1人で陣取つた俺は、周りの人など思われたのだろう。でも、そんな事どうでもよかつた。早く始まれーとばかり思つていたのだから。いよいよ開演だ。舞台に出てくる生徒の顔を探して…見つけた。「彼女からの合図を見落とすもんか」とばかりにずっと見ていた。

一曲目が終わつた時、彼女は目線を動かし、俺を探しているようだつた。気付いてくれー。願いが通じたのか、目が合つた。自然とお互い笑顔になり、彼女はウインクして見せた。あの時の胸の高ぶりは、それまで経験した事のないものだつた。

定演は、午後3時頃終わつた。終わつてからも彼女は反省会とかあると言つていたので、俺はそのまま帰つた。本当は、終わつてから話したりしたいなあとは言つてたんだけど。

夕方5時過ぎ、家でくつろいでいた所に彼女から「今終わつた」。もしよかつたらさ、今から森島堂まで出てこない？ほら、今日定演

の後に話したいって言つてくれてたじやん。駅の近くに公園あるから、そこでどうかな?」と言つてきた。部屋着になつてた俺は、すぐ着替えてその公園に向かつた。緊張しつつ、喜びつつ。

公園に着くと、まだ彼女は来てなかつた。あと5分ほどで来るらしい。そこは、大きくはないが、シーソーやブランコといった定番メニュー(?)のある、静かな公園だつた。2人でゆっくりするにはいい場所だな、と考えたので、ニヤついてしまつたかもしれない

そして彼女が来た。

「「ごめんごめん。呼んどいて待たせちゃつて」

「お待ちしておりました」

「今日は来てくれてありがとう。ワインクしたんだけど、分かつた?」

「もちろん。嬉しかつたよ。俺も返そつと思つたけど、ワインクなんできんし……」

「投げキスでもしてくれればよかつたのに」

と言つて、いたずらっぽく笑う顔もいいなと思つた。

それからしばらくいつものように楽しく話し、最後に大事な話をしてその日は帰つた。

そう、この日から俺と彼女は付き合ひ出したのだ。どつちからどんな風に告白したかって?そんなの教えねえよ。だつて照れるやん。いいんだよ、付き合ひ事になつたんだから。

それからの日々は、「人生つてなんて楽しいんだ」としか思えなかつた。朝の電車の中、休み時間のメール、綾が日曜休みの時は出かけたり、と。洋介に言つて驚かそうと思つてたら、あつちから、「お前、菅沼と付き合ひなんだつてな。よかつたやん」と言われ、逆に驚かされたり。学校で綾が自慢げに言つてきたりしない。

「『浦田くんは私たちのキューピットだからね』とか言われたよ」と洋介も嬉しそうだ。マジでいつには感謝せんとな。アイスでもおひつへやるか…

さて、年末が近くなってきた頃。世の中は完全にクリスマスモード。去年は部活のみんなでカラオケしてたな…。独り身の男ばつかでも今年はみんなに、

「悪い、クリスマスは予定あるんだ」

と言つて、お決まりの冷やかしを受け。24日は俺も綾も部活が夕方までだから、終わつてから街のイルミネーションを見に行く事にした。キラキラピカピカしてる物が好きらしい。ロマンチックやなあ。

24日。天気予報では、夜に雪がちらつくらしい。いいムードやん。そして夕方、待ち合わせた街の時計台には人があふれていた。人込みは苦手だが、上手く会えた。

「すごい人やなあ。迷子にならんといでな」

「手つないでたら大丈夫やろ。健ちゃんこそ勝手にどつか行かんといてよ」

「俺方向音痴だから」

とても寒かつたけど、綾の冷たい手をにぎつてると、心地良い温かさを感じられた。

綾の好きな、ピカピカ光るツリーの形のイルミネーションがよく見えるベンチに座った。

「きれいよね。私こういうの大好き」

ベタでクサイセリフが頭をよぎつた…が、言わなかつた。

「はい、健ちゃん。メリークリスマス」

と言つて、袋を取り出した。マフラーだ。

「昨日、ギリギリで出来たの。クリスマスカラーにしてみた。」

真っ赤な手編みのマフラーだ。俺らはちょっと前に、「まだ学生だから、何か買ってプレゼントってのは無しにしよう。物より気持ち

つて事で」と決めていたのだ。実際、どんな高価なマフラーより、綾が作ってくれた方がいいに決まってる。本当に嬉しかった。

俺は何も作れないから、手紙を書いてきた。4月から綾を意識するようになつてから、話すようになり、とても楽しくて、付き合つているなんて信じられないくらい幸せだ、といった感じの事を、汚い字ではあるが本気で書いた。綾のマフラーの後に渡すのは少し恥ずかしいけど、その場で読んでもらつた。

綾が静かに読んでる間、とにかく落ち着かなかつた。が、少しすると綾が寒そうにして鼻をすすつた。

「大丈夫？ 暖かい所行こつつか？」

「ううん。大丈夫。もうちょっとだから」

そして、全部読んだみたいで、手紙をカバンに入れた。けど、何の反応もない。

「綾？」

「…うう。せつかくのクリスマスに女の子を泣かさないでよね」と言つて、目に涙を溜めながら、いたずらっぽく笑つた。

「あ…え…『ごめん。泣かそつとは思つてなかつたけど…』

「感動してるので『ごめん』は無いでしょー。ありがとう。ヒーツても嬉しいよ」

「よかつた。マフラーありがとう。これから毎日するよ」

寒さと、クリスマスの雰囲気も後押しして、少しでも温かくなるようになづき、2人の初めてのキスをした。照れ隠しに笑い合つて、家路についた。

その後も、とにかく綾の事ばかり考えて生活をしている感じだ。

正月、バレンタイン、ホワイトデー。そして春になり、3年生になつた。

4月は俺の誕生日があるが、なんと綾は俺の5日後が誕生日だった。2人の誕生日プレゼントとして、2人とも好きな川嶋あいのライブに行つた。最初に聞いた綾の歌は「明日への扉」だつたなと思

い、懐かしくも感じた。

綾が応援に来てくれた、高校最後の試合も終わり、俺は一足先に受験の事を考えるようになつた。綾は最後のコンクールが夏前だから、もう少し時間があつたが、一緒に進路の話しあるよになつた。

「俺のやりたい事が一番出来るのは、関東の大学になるんだよな。綾は県内に残るん？」

「うーん、県内の看護大になるかなあ。外には出したくないって親が言つてるから」

「そつか。なら俺も県内で探してみよっかな」

「こら。そりやあ県内でもやりたい事ちゃんと出来るんなら近くにいれる方が嬉しいけどね。妥協して県内に残つても口利いてあげないかんね〜」

綾は妥協が嫌いな子なんよ。だから、俺が本当は関東に行きたいと知つて、県内に残つたらダメって言うのや。「遠距離になつたって、3時間あれば帰つて来れるんだし、寂しくなつたら遊びに行つてあげるよ」つて。ホントしつかりしてるわ。

綾の部活も終わり、夏休み。受験生にとつて、勝負の時期だ。学校の補習は受けたが、それ以外の時間は市の図書館で綾と勉強した。時々、洋介カツプルも一緒になつたりした。

相変わらず進路は悩んでいた。どうにかして県内に残る理由を考えようともしたが、全部綾はお見通しだ。

「こら。私じゃなくて問題見て勉強しなさい」

とよく注意された。でも、自分の勉強してる時より、綾に教える時の方が楽しいんだもん。こういう時は、数学得意でよかつたと思う。世の中に数学好きが増えたら、俺の出番がなくなつてしまつ..まあ、どっちみち綾しか教えないけどね。

夏休みが終わると、冬まであつといつ間だった。あと2週間で、

2回目のクリスマスも見えてきた。

「今年はさすがに予備校だね…あ、クリスマスにお守り作り合って受験に持つてくのはどう?」

「お、いーね。でも…あの…俺縫い物できんけど…」

「ん~、任せた。健ちゃん流のやつね」

俺流か。指を刺す覚悟で縫つてやる。

24日。センター直前講座を2人で一緒に受けている。昼の休みに、

「メリクリ～。まず私からね」

と言つて、赤いフェルトで作られた、ハート型のお守りてくれた。
「絶対に効くからね」

これは心強い。

「じゃ俺のも。ほら、縫えだし」

「おー、すごいやん。しかもちょっと上手いし」

「本気を出せばこんなもんよ。念力込めといたから」

「念力つて…なら筆箱に付けよつかな」

俺流のお守りは、紙に「綾 絶対合格」と書き、裏に「ずっと一緒にいよう」と書いて、青いフェルトで包んだものだ。両方の願いが届くといいな。

年が明け、センター試験がやつてきた。お守りの効果はすごかつた。綾も俺も、いつも以上の点数だった。だがそれは、俺の関東受験を決定付ける点数でもあった。もし、センターが悪かったら、ランクを落として県内にしたのだが。その事を綾に話した。

「綾のお守り、効きすぎるよ～。それで、俺、関東を受ける事にするよ。ごめん」

「なんで謝るのさ。そのためにお守り作ったんやん。頑張つてよ。

私も頑張るからね」

綾は大人だな…あ、俺が子供なんだな。とにかく、今は頑張つて、2人とも喜べるよつにしないと。

1月の終わりのある日。朝いつも乗つてくるはずの駅で綾が乗つてこなかつた。最近は朝、洋介も一緒にいるんだから、東野高校も

授業はあるはずだ。 「おはよ。今日学校行かんの?」とメールをしても返つてこない。「変だな」と洋介と言いながらも、学校に行つた。

学校に着いて、1時間目が始まる少し前に、洋介からメールが来た。

「おい、菅沼が今朝事故に遭つたらしい。詳しい事は次の休み時間に話す」

何の事が分からなかつた。事故のニュースをテレビで見ていぐらい、ピンとこなかつた。休み時間までの1時間がとても長く感じられた。洋介から電話が来た。

「朝、担任が『菅沼が今朝、自宅から駅に自転車で行く途中、車にはねられた。近くの病院にすぐ運ばれたが、状態は分からない。私は今から病院に行つてくる。一度に大勢が押しかけると混乱するから、君達はまだ病院に行かないように。心配なのは分かるが、お見舞い出来る状況になつたら私から連絡するから。それまではきちんと勉強してるように』って言つてた」

「まだどんな状態が分からないのか?」

「分からぬ。でも言い方からすると、ただ骨折つたとかじやなさそうだなってみんなと話してゐる。お前の携帯には何も連絡ないのか?」

「全く。学校昼で終わるから俺行つてくるわ」

「そつしてやれ。しつかり見舞つてやれよ」

ようやく学校が終わつた。俺はすぐに『綾が運ばれた病院へ行き、綾の病室を聞いた。

「菅沼さんは今、集中治療室ですので、『面会はできません』それでも、集中治療室を探し、テレビでよく見る、赤いランプのある扉に着いた。扉の前のソファーに、1人の女性が心配そうに座つていた。綾のカバンを持つてる。綾のお母さんだろう。

「あら…菅沼さん…ですか?」

「ええ。あなた、どちら様？」

「あ、僕岡本健太です。実は綾さんとお付き合ってさせていただいている…」

「あなたが。いつも綾が『健ちゃん健ちゃん』と言っています。事故に遭つた事をご存じで？」

「東野に行つてる友達が教えてくれて。綾さんどうなんですか？」
「頭を強く打つたみたいで、まだ意識が戻らないんです。脳に出血もあるみたいで。気持ちは分かりますが、いつ話せるようになるかわかりません。今日の所はお引き取りください。あなたも受験すると言っていますよ。意識が戻つたらすぐ連絡しますから。今日の所は…」

何度も「もう少し待たせて下さい」とお願いしたが、お母さんも気持ちが張り裂けそうなのだと氣付き、その日は帰る事にした。多少、氣が動転していたようだが、しっかりしたお母さんという印象を受けた。俺の事を綾から色々聞いていてみたいで、俺の事まで考えてくれる。綾に、俺とお母さんが仲良くなつたところを見せて、びっくりさせたいと思つた。

2日後、治療室から出て個室に移ったと洋介から聞いた。が、相変わらず意識は戻らない。綾のお母さんに、会わせてほしいとお願ひしたら、特別に行つてもいいということだったので、変な緊張はしたけど、会いに行つた。

病院に着くと、ロビーまでお母さんが迎えに来てくれていた。案内され、少し大きめの個室の前で手を消毒した。お母さんの後について中に入ると、一つしかないベットに、オレンジの入院着を着た綾がいた。もちろん目は閉じている。ベットの横にはいくつもの機械が綾を囲んでいて、額には事故の時の傷と思われるものがいくつもあつた。そんな姿を見ながら、いつの間にか涙がこぼれていた。痛かっただろうに…あの日もいつもと同じように元気に電車に乗つてくるはずだったのに…なんで綾なんだよ…他の人じやなくてなんで綾が痛い思いをしなきゃいけないんだよ…

しばらく病室の窓から外を見ていて、気持ちを落ち着かせていた。お母さんが「今日は帰つたら?」と言つてくれたが、頑なに「嫌だ」と言つた。そして、お願ひもした。

「これから毎日ここで勉強させてもらえないですか。綾の隣で」

「毎日つて、あなた学校は?」

「明日からは補習だけになるんで行きません。どうにいても綾の事が気になるので、ここにいさせてください」

「そうねえ…そつ言つのなりいわよ。でも、ちゃんと勉強しないと帰つてもらいますよ。綾は、自分のせいで健太君の勉強の邪魔をしてしまう事が一番嫌だと思うから。それだけはこちからお願ひします。綾のお願いとしてね」

「わかりました」

こうして、綾の病室で過ごすようになった。面会時間の最初から

最後までずっと。時々綾に話しかけたり、手をにぎったりしながら。綾につながっている機械の音しか聞こえないけど、俺には綾が必死で頑張っているのが分かった。「勉強しろよ～」と言いつつにも見えた。

日曜には、綾のお父さんがいきなり来て、めちゃくちゃ緊張することもあり。お父さんは大学の先生だそうだ。風格がある。色々ありながらも、病室で2週間ほど過ごした。依然綾は変わらずだ。俺に余計な事を考えさせないように、詳しい病状は教えてもらえないのだ。両親とも、とても気を使つてくれている。

そして、俺の大学2次試験までちょうど1週間になつた日。綾の両親が話があると言つてきて、お父さんが話し始めた。

「健太君の試験まで1週間だね。だが綾は変化がないのはよく知つていると思う。ずっと綾の側にいてくれて、とてもありがたく思つてているんだ。ただ、大学受験というのは、君の人生を大きく左右するものだ。今まで、君が頑張つていた事は十分知つている。しかし、やはりこの最後の1週間は100%勉強に集中してほしいんだ。君が大学に合格する事が、綾にとって、我々にとつて一番の願いなんだよ。だからこの1週間、ここには来ないで、勉強の事だけ考えてくれ。もし綾に何か変化があつても、君の試験が終わるまで連絡しない事にする。悪く思うのなら思つてくれて構わない。試験が終わつてからまた会いに来てやつてくれないか」

このお父さんの言葉から、提案ではなく、強い気持ちが感じられた。綾の事を考へないなんて出来るわけないが、「俺が受かつたら綾は元気になるんだ」と思つよつにすると決めた。

「わかりました。綾に手紙だけ置いて行きますね」

そう言つて、綾に手紙を書いた。

“綾へ

おはよ。大変だったね。頭痛くないか?

俺は今から来週の試験に向けて勉強します。綾の近くにいたいけど、綾のために合格目指すよ。綾のお守りはすごい効果だから、今回も力を貸してね。

それじゃ、行ってきます。

健太

手紙を書いてから、綾のカバンの中から筆箱に付いてるお守りを取り出した。そのお守りと手紙を、ベットの横の机に置いて「行ってくるね」と言って病室を後にした。

試験はどんな問題だつたか覚えていない。頭で解くといつより、手で解いていた。

試験が終わって、その日のうちに帰つて来たが、もう面会時間は過ぎていたため、明日行く事になつてしまつた。少しでも早く綾の様子を知りたくて、お母さんに連絡を取ろうとしても、つながらない。嫌な予感がした。

その日は全く眠れず、次の日朝早くに病院に向かつた。まだ面会時間まで1時間ほどあつたが、外来患者に紛れて綾の病室に行つた。変な緊張が体を包んでいた。

そして病室の前に着き、大きく息をしてからドアを開けた…

何も見えなかつた。

正確に言つと、そこに在るべきものが見えなかつた。

綾がいない。ベットはきれいに整えられていて、机の上に置いた手紙もお守りも無い。

俺は目を閉じた。そして、さつきより大きな息をした。

「なんで…」

その時、後ろから肩をたたかれた。振り返ると、綾のお母さんがいた。

「お疲れ様」

と言つて、少しだけ微笑んでいるように見えた。

「あの…あの…」

俺が何とかして言葉を探していると、お母さんは何も言わず歩き出した。わけも分からず、しかし、後について行つた。

ナースステーションの前で待つように言われた。俺は、ナースコールの名札に、綾の名前があるか探した。が、字が小さすぎて見えない。目を細めて探していると、

「おかえり」

後ろから声がした。

「綾」

俺は振り向く前にそう言つたと思う。振り向くとそこに綾がいた。
点滴をしているが、普通に歩いている。また言葉を探していた。

「おかえり、健ちゃん。試験どうだつた?」

いつもの綾の声だ。なんでこんなに普通なんだと思つくらい、俺の
知つてゐる綾だつた。

「…ただいま」

それしか言えなかつた。

2人で、中庭が見える所のベンチに座つて少し話した。

「健ちゃん、泣いたらしいやん。お母さんから聞いたで~」

いつもの「いたずら笑顔」だ。

「暖かい病室に入ったから目が曇つたんだわ」

「へえ~」

と、楽しく話していたが、何かスイッチが入つたかのように綾の様
子が変わつた。

「怖かつた…なんかね、健ちゃんやお母さん達が話しかけてるのが
聞こえる時もあつたの。だから返事してゐつゝもりなのに、何も見え
ないし言葉も出ないし。このまま一度と話せないままのかなとか
考えると…本当に怖かつた」

まるで何かから開放されたかのように涙を流した。

「きっと健ちゃんのお守りのおかげね。ありがと~」
また笑顔を作りながら言つた。

「綾のお守りもかなり効いたよ」

「そう?嬉しいな。なら4月から健ちゃん大学生やん」

「んー…まだ決まってないけどな」

「私は来年も受験生やわ。でも、大学生より受験生の方が若く聞こ

えるよね』

「それは俺が年寄りだつて言つてゐるのか?
『ん~、どうでしょ?』

綾は元気になつた。俺の試験の前々日に意識が戻り、次の日には4人部屋に移つたらしい。実は、東野高校では綾の意識が戻つたと知らされていたらしが、洋介はわざと俺に教えずにいてくれたという事だつた。アイスもう1個おごつてやろう。

そして3月上旬、俺の結果発表と綾の退院の日が同じになつた。これを運命と呼ぶんだな。俺は無事合格。綾にすぐメールで報告したら、

「じゃ今から公園でお祝いしよ」

つて。公園でお祝い?と思ひながらも、俺達の思い出の場所でもある公園に行つた。

「退院してすぐに外出て大丈夫」

「少しならいいつて言われたから。健ちゃん、おめでとう」
プレゼントもくれた。

「おお、ネクタイやん。ありがとうな」

「いえいえ。入学式にでもつけてね」

「もちろん。つけたら『写メ送るよ』

のんびりした天氣だ。

「受験前の大事な時に、迷惑かけてごめんね」

いきなり綾が言つた。

「なんで綾が謝るんよ。悪い事してないのに。それに、綾が好きで毎日近くにいたんだからさ。あと、いい事教えたる。誰かに何かしてもらつた時に、『ごめんね』って謝るのはよくないんだよ。そんな事言われると、何かした方もされた方も気持ち悪いやん。そういう時は『ありがとう』って言うんよ。ありがとうってどういう意味

「や？」

「どうこうして？」

「漢字2文字で」

「感謝」

「そうやろ。『ありがとう』って、お礼を言いながらも、迷惑かけちゃった事を謝る。『感謝』の謝ね。だから、人に迷惑かけてしまつたとしても、その人が助けてくれたんなら『ありがとう』って感謝するとええよ」

「そつか。なら健ちゃん、ありがとうね」

そう言って、軽くキスをしてきた。

その後のノロケ話は省略しておくよ。聞きたくない人もいるだろうからね。

4月から、それぞれの新しい道が始まった。俺は普通の大学生。ゴールデンウィークや夏休みなど、何かあつたら3時間かけて帰省していた。別にホームシックじゃなくて…

頼まれてもないのに、綾の勉強を見るためだ。

その甲斐あつてか、綾は無事、県立の看護大に合格した。

俺と綾の色々な出来事はこのあたりでおしまい。2人とも大学生を頑張ってるよ。俺は2年後に就職して、地元に戻るつもりでいる。これでまた綾と一緒にいられる時間が増えるぞ。

綾、今まで色々あつたけど、ありがとうな。そして、これからもよろしく。

俺と綾はずっと一緒にいる。ずっとね。

||
||
||
||
終
||
||

7章（後書き）

初めて書きました。色々な感想を聞かせてもらいたいです。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047d/>

ありがとう

2010年10月8日14時40分発行